

〈ベルクソン形而上学〉への入門

—『形而上学入門』における〈やり直しの論理〉—

磯島 浩貴*

Introduction to “Bergson’s Metaphysics” “The logic of retracing” in *Introduction to Metaphysics*

ISOSHIMA Kouki

論文要旨

本論の目的は、ベルクソンが『形而上学入門』で企図した「形而上学に基礎付けられた方法論」の内実を描き出すことである。〈ベルクソン形而上学〉には、「共生学」の方法論にも関わる両義的な側面がある。それは、实在把握に関する「分析」と「直観」とに区別される両認識は相補的に進むあり方もありうる、というベルクソンの主張に存する。この〈ベルクソン形而上学〉に付随する難点は、直観と分析という概念に付随する三つの認識様態の検討を通じて解消される。特に本論の独自な点は、ベルクソンの「直観」概念に〈やり直しの論理〉という形而上学的規定が存することを指摘し、両認識の相補性が担保された〈直観的な科学〉というヴィジョンを鮮明にした点にある。

キーワード ベルクソン形而上学、直観、やり直しの論理、直観的な科学

Abstract

This paper aims to elucidate the essence of the “methodology grounded in metaphysics” as envisioned by Bergson in *Introduction to Metaphysics*. It highlights an inherent ambiguity in the methodological framework of “Bergson’s Metaphysics,” akin to a similar issue observed in “Kyosei Studies”. This ambiguity resides in Bergson’s contention that the two modes of knowledge—“analysis” and “intuition”—applied to the understanding of reality may also advance in a mutually complementary fashion. The challenges associated with this “Bergson’s Metaphysics” are addressed by examining the three cognitive modalities tied to the interplay of intuition and analysis. The distinctive contribution of this paper lies in identifying a metaphysical definition of “the logic of retracing” within Bergson’s notion of “intuition” and elucidating the vision of an “intuitive science” where the complementarity of these two cognitive modes is fundamentally affirmed.

Keywords: Bergson’s metaphysics, intuition, the logic of retracing, intuitive science

* 大阪大学大学院人間科学研究科特任助教；isoshima.kouki.hus@osaka-u.ac.jp

1. はじめに

ベルクソンが1903年に『形而上学道德評論』で発表した「形而上学入門」という論文は、文字通りの意味で、ベルクソン自身の「形而上学」への考え方が開陳されている。しかし、その〈ベルクソン形而上学〉の内実は、容易な単純化を許さないものでもあった。というのも、対象を外側から相互外在的に捉える「分析」と、対象を内側から相互浸透的に捉える「直観」との間に明確な区別を設けながらも、この両認識とが相補的に働く認識のやり方もありうる、と主張されるからである。いわば、「対象」への理解に対して学問上のディシプリンの違いから根本的な認識の差異が生じることを認めながら、これら複数のディシプリン同士の相補可能性を担保する方法論を打ち立てること、これが〈ベルクソン形而上学〉の試みである。

このような観点からすれば、互いに異なる学問上のディシプリンを抱えながらも、「共生社会」の実現に向けて、多くの学問領域を横断可能とする相補的な方法論の確立を目指す「共生学」の企図に対し、〈ベルクソン形而上学〉はひとつの理論的視座を与えることになるといえよう。ひとえに、〈ベルクソン形而上学〉とは、領域横断を旨とする「学」に対し、その方法論に関するひとつの事例となるものだからである。

さて、ベルクソンの「形而上学入門」という論文は、その発表から様々な読まれ方がなされてきた。その読まれ方のひとつとしてよく知られているのは、「形而上学入門」におけるベルクソンの科学認識を巡る議論であろう（cf. 杉山 2006:第二章第五節）。

この議論は、ベルクソンが「形而上学入門」を発表する以前から始まる。その出発点は、コレージュ・ド・フランスにおけるベルクソンの後任者となるル・ロワが、『物質と記憶』で提示されたベルクソンの知覚論に基づいて再構成した認識論を〈ベルクソンの科学認識論〉として提示したところにある。しかし、ベルクソンの科学認識論とは客観的な事実を示すはずの科学的な事実を人為的に構築された使用に便利な表象群と見なしている、というル・ロワの定式化には即座に疑義が寄せられた。すなわち、科学は人為的に再構成された事実のみ認識するというある種の規約主義的な立場は、科学による人為的な再構成以前の経験という審級を規定することになる。そし

て、この審級を真なる実在と見なした上で、哲学はこの実在を認識可能だと立論する。その結果、ル・ロワ＝ベルクソンの立場は、科学と哲学の認識のあり方を区別するのみならず、実在に関する根本的な区別をも規定したのではないか、という疑義が寄せられたのである。

このような疑義に対し、ベルクソンは〈科学と哲学の関係を考慮に入れた実在の認識〉という主題を巡って自らの見解を「形而上学入門」で提出した。しかし、そこでのベルクソンの記述は、一方で哲学（形而上学）的認識は直観によって絶対に達するが、科学的認識は相互外在的な記号的関係の記述に留まると断言しつつも、他方で両認識が相補的に働く〈直観的な科学〉によって実在における「絶対」という審級に達しうる科学的認識のヴィジョンを高らかに示唆するものであった（PM:216-217/296-297 頁、以下ベルクソンのテキストから引用する場合に限り、略号、原典頁数、翻訳頁数の順に本文中に表記する）。

以上の議論から見えてくるのは、杉山が指摘するように「形而上学入門」では〈いかなる仕方で科学的認識を正当化しているのか〉という論点をベルクソンが明瞭に語らないままに終えた、ということであろう（杉山 2006:185）。確かに明瞭ではない。そのこと自体に異論はない。ただ、明瞭ではないだけで、〈ベルクソンは直観という概念を提示することで哲学（形而上学）と科学の関係を繋ぐことで実在の把握に関するひとつの方法論的立場を提示しようとしていた〉ことも確かであろう。つまり、ベルクソンは「形而上学入門」で科学認識も絶対に達するという主張に体系的説明を施していないことは事実である。しかし、ベルクソン自身が科学認識もまた直観という形而上学的認識に立脚したあり方のもとで描き出すことができる〈形而上学を基礎に据える実在把握という方法論〉を提示していることも事実である。いわば、後者の〈形而上学を基礎に据える実在把握という方法論〉という論点を〈形而上学という学への入門の仕方〉と解することこそ、「形而上学入門」という論争的な論文の核心ではないか。本論の立場はこの点にある。

かくして、本論では〈ベルクソンの方法論〉の内実を描き出すことに焦点を当て、〈直観的な科学〉という奇妙に見える概念に込められた思想のポテンシャルを見積もることを試みる。これが本論全体の目標である。

2. 1900年代から1960年代までの「形而上学入門」の読まれ方

さて、〈ベルクソン形而上学〉の方法論的側面への関心は、純粹にフランスアカデミズムに閉じていたわけではなかった。むしろ、「形而上学入門」出版当時から1960年代までの読まれ方を瞥見する限り、多様な論者が「直観」概念の有する方法論的射程に関心を寄せている。本節では、1900年代から1960年代までの「形而上学入門」の読まれ方の一端を確認しておこう。

コレージュ・ド・フランスで行われていたベルクソンの講義に熱心に参加していたことで知られているシャルル・ペギーは、ベルクソンの「形而上学入門」に特権的な価値を見出していた。ペギーは、1900年から始まるベルクソンの講義にそれ以前の思想の更なる展開を目のあたりにしていたからである。そして、そこでのベルクソンにおける方法論における思想的展開が、「形而上学入門」において体系化された、とペギーは理解していたからである（Péguy 1987:1760）。さらに、ペギー自身は、〈私たちのその時々々の視点と表現に用いる記号たる言語に依存する相対に留まる認識のあり方〉（cf. PM:177-178/254 頁）というベルクソン自身の言語に関する否定的な評価に対し、〈言語が人間の思考の表現であると同時に、あらゆる人間的行為が言語によって表現されるという制限が存するのであれば、人間的表現における言語の制約を正確に知ることによって人間は表現における言語の隷属から抜け出すことができる〉（cf. Péguy 1987:1796-1798）、という搦手からの展開を試みた。いわばペギーは、ベルクソンが提示した形式を自らの実践的課題に応用する読み方を行ったのである。この意味で、ペギーにとって、ベルクソンの「形而上学入門」は、自らが展開したい哲学的課題に有力な手法を提供してくれる「方法論」のテキストにみえていたといえる。

ベルクソンの「形而上学入門」に対して、このような肯定的な見方を採用したのはペギーだけではなかった。実際、『暴力論』で知られるジョルジュ・ソレルもまた、社会及び政治の真なる実在に到達するためには、マルクス主義が体系化した象徴的な知的構築物としての労働運動理論を越えて、ゼネストの神話という労働運動の内的運動を形成するイメージに結びつくことが必要だと考えた。ソレルもまた「形而上学入門」の方法論的側面に着目することで、ベルクソンが真なる実在の審級として提示した「ひとつの総合的

経験 *une expérience intégrale*」と、ソレルの「労働運動の深い直観 *la profonde intuition du mouvement ouvrier*」とを重ね合わせる (Sorel 1972=1908:186-189)。

また、ペギーやソレルとは異なり、ベルクソン哲学に対する激しい批判を行ったことで知られるジュリアン・ベンダも、ベルクソンの直観概念とは〈絶対主義的あるいは増大する認識、すなわち他の対象との諸関係で知解するのではなく、対象そのものを把握する認識〉という方法論的側面を重視する読解を提示する (cf. Benda 1910)。このベンダの読解は、バートランド・ラッセルによる〈知性よりも本能による内的な無媒介の認識を称揚する反知性主義的な方法論〉という規定と軌を一にするものである。このラッセルのベルクソン批判は、形而上学的な直観に対する論理分析の優位性を示す立場である (cf. Russell 1914; Russell 1918)。そして、ラッセルが論理的原子論として規定した立場は、感覚的経験を越えた形而上学的知識を誤りとして全面的に否定する論理実証主義の中心メンバーのひとりであるモーリッツ・シュリックのベルクソン批判にもつながっていく。大まかにまとめるならば、ベンダもラッセルもシュリックも、否定的な姿勢を一貫させながらベルクソンの「直観」概念を、知性的な認識を多分に越えた「方法論」として理解していたのであり、その主要な参照先と見なしていたのがベルクソンの「形而上学入門」であったといえよう。

あとひとり見よう。それは、1940年代半ばからサルトルやメルロ＝ポンティを旗手とした現象学の隆盛、加えてレヴィストロースやジャン・ピアジェに端を発する構造主義の隆盛によってフランス内部ですら忘却された存在となっていたベルクソン哲学を、そのモノグラフの執筆によって再び検討の対象に置くことに成功したジル・ドゥルーズの直観解釈である (cf. 檜垣 2000)。ドゥルーズの直観解釈は、彼の『ベルクソニズム』やそれ以前の「ベルクソンの差異の概念」から見てとれるように、〈直観とは差異あるいは分割の方法として提示される〉というテーゼで指し示されるものである。ドゥルーズ曰く、直観とは〈感覚的多様として存する混合物を二つの傾向に分割する〉方法である。そして、その主眼は〈純粋でありながら、生きたものでありながら、絶対的ながら経験されたものを経験の唯一の条件 (傾向性) として把握する方法論〉の提示にあり、複数の概念で説明することを許容する別の諸傾向性として混合物を把握するものではなく、「これ」というひとつの概念でしかありえないような唯一の条件 (傾向性) を把握する方法論とし

て直観概念を規定する点に存する。かくして、直観概念とは「ベルクソンの方法論」の別名に他ならず、それは「高次の経験論 *un empirisme supérieur*」として駆動させるための鍵概念となる。このように、ドゥルーズはベルクソンの直観概念を方法論としてみている (cf. Deleuze 1966; Deleuze 2002=1956)。

このように、ベルクソンの「直観」概念に対し、当時から肯定的に受容したペギーやソレル、反対に否定的な仕方を受容したベンダやラッセルやシュリック、そしてベルクソンの存在が忘れられた頃に再評価したドゥルーズという、1900 年年代から 1960 年代までの「形而上学入門」の読まれ方を瞥見する限りでも、その議論の中心に常に置かれているのは〈ベルクソンの方法論〉である。そして、その語られ方は、自ら探究したい領域をもつ者を後押しするような方法論、既にして別様の領域と手法をもつ者としては受け入れがたさを多分に感じるような方法論、そしてそのような方法論に対するメタ的な分析といったものとして整理できよう。では、以下本論では、このような多様な読まれ方や語られ方を許容する〈ベルクソン形而上学〉に基づく方法論の実相を見ていこう。

3. 「形而上学入門」における「直観」と「分析」を巡る整理

本節では、「形而上学入門」の基本的な論点を確認することから始めよう。それは、ベルクソンの認識論の核となる、科学的認識である「分析」と、形而上学的認識である「直観」という二種類の概念である。ベルクソンは両概念の検討を通じて、実在を「絶対」の姿で認識するための哲学的方法論を提示することを試みる。この二つの認識論を提示するに至ったベルクソン自身の動機は、彼が冒頭につけた長めの注釈から伺うことができる⁽¹⁾。ここまではよく知られている議論だといってもよい。

しかし、「形而上学入門」という論文が、論争的であるゆえんは、この二元的な概念整理の先にある認識様態の区別にあるといえよう。すなわち、ベルクソン自身の判定として、哲学的方法論は、〈分析的認識だけでは不可能〉であると同時に、〈分析的認識と直観的認識とを混同した認識においても不可能〉であることを示した上で、〈実在を絶対の姿で認識する方法は形而上

学的な認識である直観のみ可能)であることが示されている。本節では、上述のひとつ目と二つ目の認識様態の区別を検討し、なぜベルクソンが分析的認識を支える形而上学的原理を拒否するのか、ということの理路を明らかにする点にある。このことは、次節で検討する、ベルクソン自身の直観的認識を支える形而上学的原理を明確化するためにも必要である。

3.1 方法論的省察(1):〈分析的認識のみの立場〉への批判

では、ベルクソンが「形而上学入門」で提示する、「分析」と「直観」という根本的に異なる二種類の認識の区別を見ていこう。

形而上学の諸定義と絶対の様々な捉え方を互いに比較してみるならば、哲学者たちの意見は、見かけは異なっているが、物を知るのに根本的に異なる二つのやり方を区別する点では一致していることに人は気がつく。第一のやり方は、物の周囲を回ることである。第二のやり方は、物の内に入ることである。第一のやり方は、人がよって立つ観点と、象徴的記号による自らの表現に左右される。第二のやり方は、いかなる観点にも関係なく、そしていかなる象徴的記号にも頼らない。第一のやり方の認識は相対 *relatif* に留まり、第二のやり方の認識は、それが可能であれば、絶対 *absolu* に到達する、といえよう。

(PM:177-178/254 頁)

「分析」とは、対象の周りを回するようなやり方の認識である。このやり方は対象に対して外側から様々な角度から眺めるような認識である。しかしながら、見られた姿のひとつひとつは確かに同じひとつの対象の姿でありながら、どれひとつとして対象の同じ姿を表すものではないし、見られた対象の姿のどれひとつ対象の真の姿を表すものでもない。だから、このやり方において、対象は「対象そのものの姿」は直接的に見てとれるものとして現れているのではなく、「象徴的記号」という暫定的で仮定的な存在として現われているといえよう。したがって、対象の周りから知覚することでえられるあらゆる対象の姿は、ある視点から見たものと別の視点から見たものとは

違う、という仕方です。「相対的」に扱うことになる。かくして、ベルクソンによると、分析的認識を進めることは対象の象徴的記号の姿がより増えるだけであり、対象そのものへの認識が深まることにはならないため、分析は「相対に留まる」ことになる。これが、「外からの認識」、「視点と象徴的記号に依存」、「相対に留まる」という三つの特徴をもつ「分析」というやり方の認識である。

すなわち、分析的認識の根底を支える形而上学の原理のひとつは、〈象徴的記号を実在と同一視する〉ところにある。そうすると、象徴的な記号を実在と見なし始めることで、〈実在そのものを認識しているのではなく象徴的記号を認識しているに過ぎないのに、「実在」を部分的に認識していると勘違いする認識論的な誤謬に陥る〉のである。注目に値するのは、対象の象徴的記号化を前提する限りで、実在を部分的に認識しているという主張が成立するところにある。こういってよければ、対象とその表象としての記号は等価であるという〈同一視〉を前提とするならば、分析的認識は実在の部分的認識を表象するとされる象徴的記号を、〈これではない何かに向けて〉際限なく産出し続けて認識するのである。以上が、「分析」という認識のやり方を通じて主張されるベルクソンの立場である。

反対に、「直観」とは、対象の内に入るようなやり方の認識である。このやり方は対象に対して内側から眺めるような認識である。ここでのベルクソンによる「直観」の説明は否定的な表現に留まっている。というのも、直観とは、外側からのその時々視点にも関係がない認識であり、対象そのものを象徴的記号という仮定的存在を介さない認識だ、として否定的に表現されているからである。しかしながら、以上の規定が示すのは「分析ではない認識」に直観もまた含まれるということであって、直観という認識の肯定的な規定ではない。では、なぜ「対象の内に入る」直観というやり方の認識は「絶対」に至るとベルクソンは主張できるのだろうか。

この問いに対するベルクソンなりの応答は、「内」の意味を掘り下げると「絶対」が出てくることになる次第を示す点にある。そこで組上にあげられるのが「空間における物体の運動の知覚」と「小説の中に登場する人物に対する作者と読者との関係」という二つの例である。

ベルクソンによると、空間における物体の運動の知覚は、「不動の視点」

で見るか、「動く視点」で見るかで変わる。一方の「不動の視点」とは分析というやり方の認識のことである。この認識では、「自らがよって立つ視点」に依存する仕方では運動に単位、座標系、基準軸という外的な記号を導入し、運動同士をその任意の枠組みで互いに比較できるように、認識者は運動の外部から相対的に知覚する視点をとる (PM:178/254-255 頁)。他方の「動く視点」とは直観というやり方の認識のことである。そこでは、知覚対象たる運動に「ひとつの内部 *un intérieur*」言い換えれば「気分のようなもの」を認め、このような運動の「内」に入るということは、対象が運動を通じて変化させるその気分のようなものに対し、私は「想像力の努力 *un effort d'imagination*」を働かせ、対象の運動の気分と私とを「共感」させるということである。私が対象の運動の気分について「共感する *sympathise*」時、対象の運動の仕方に応じて、共感している私もまた対象の気分に合わせて右往左往する。この時、私は対象の運動を外部から、私の視点に影響される形で捉えていない。私は想像力によって対象の運動と共感し、「運動を内部から」、「対象の中で」、「それ自体において」捉えようとしている。こうしてベルクソンは、直観というやり方における「視点への依存なき」認識は、「私が絶対をつかむ *Je tiendrai un absolu*」認識だと主張する (PM:178/255 頁)。

この考え方は、「小説の中に登場する人物に対する作者と読者との関係」の比喩でも一貫している。ベルクソンによれば、「作者による小説の登場人物の描写」は「象徴的記号に依存した」認識のあり方であるのに対し、「読者による小説の登場人物の把握」は「象徴的記号に何ら依存していない」認識のあり方である。作者は、物語の中の登場人物の具体的な姿を読者に思い描いてもらうために、あたかも登場人物の視点に立ってその人物の属性や来歴を詳細に描くだけでなく、また登場人物らしい挙動を遂行させる。しかし、このような仕方では作者が読者に伝えた登場人物に関するあらゆる描写は、どこまでも読者が既に知っている様々な人物像と比較させて理解してもらう仕方では表現することに留まっている。要するに、このような表現方法は、「登場人物の人物像」を「人間像一般」という象徴的記号に委ねて、つまり〈「人間像一般」のひとつの言い換え〉として表現するものである。それゆえ、作者による小説の登場人物の描写は、登場人物を外から捉えざるをえないような地点に読者を置くような、象徴的記号に依存した認識のあり方に他ならない、とベルクソンは指摘する (PM:179/255-256 頁)。

他方、象徴的記号に依存しない「読者による小説の登場人物の把握」とは、ベルクソンによれば「私が登場人物自身と一瞬間でも一致することがあれば体験するに違いない単純で不可分な感情を抱く」ことに存する（PM:179/255 頁）。ここでも、「運動にひとつの内部」を認める上述の「動く視点」と同様の論法が採用されている。すなわち、登場人物を対象と見なし、その内部に運動の仕方に応じて変化する気分のようなものを認め、その運動の内部へ読者である私が想像力を働かせて「共感」という認識モデルである。加えて、ベルクソンによれば、共感が行われたか否かの判定は、読者である私たちに「単純で不可分な感情」が体験されたかどうかによって決まる。すなわち、共感という対象の内に入るような認識が行われた時、運動の内部は「単純で不可分な感情」として「一挙に全体的に私に与えられる」認識となる。だからベルクソンは、象徴的記号を介さない共感の只中の認識を、「登場人物」という運動が遂行する行動、身振り、言葉が、いわば「単純で不可分な感情」という泉から自然に流れ出るように〈私に〉体験される、と描くのである（ibid.）。こうしてベルクソンは、直観というやり方における「象徴的記号への依存なき」認識は、「私に絶対を与える *me donnerait l'absolu*」認識だと主張する（PM:179/256 頁）。

しかし、なぜ対象の内部を共感によって「単純な不可分な感情」として捉えたら「絶対」と評価できるのか。少なくとも、このベルクソンの判定には、直観は分析よりも高く評価するニュアンスが存することは確かであろう。本項では、最後にこの点を検討しておこう。

ベルクソンによれば、直観によって捉えられた「絶対」としての認識は、「完全 *perfection*」と同じ意味をもつ（ibid.）。ここでの「完全」とは、いわば運動とみなされた対象がもともと持ち合わせている「ひとつの内部」、あるいは「単純で不可分な感情」が、〈何ら欠けることなくそのまま保持されたまま認識されたこと〉を示す。逆説的な言い方になるが、このことは、運動の内部や単純で不可分な感情が保持されず消失した認識、あるいはこれらを破損させるような認識は「絶対」とは呼べない、とベルクソンが判定していることを示す。

上述の二つの比喩の検討だけでなく、ベルクソンがしばしば「部分－全体」関係に基づく分析的認識の批判や、原典とその模造の関係を記述する分析

的認識として提示する「翻訳」の比喩は、この観点から理解すべきだろう。すなわち、「絶対」としての全体がその部分の集合によって十全に再構成されえず、また「絶対」たる原典が他言語への翻訳において十全にニュアンスを移し替えられないのは、対象の運動の内部に存する固有性が保持されずに消失し、破損して別様の「相対的な観点」へと化すからである⁽²⁾。したがって、ベルクソンは、実在の絶対の姿である運動の内部という単純で不可分な感情は「あるがままにある」からこそ完全だ、という判定を下すのである（PM:180/256 頁）。この判定こそが、分析的認識では実在を「絶対」の姿で認識することは不可能だ、というベルクソンの主張の核心といえよう。

3.2 方法論的省察（2）：〈分析と直観を混同する立場〉への批判

ここまでの議論を通じて、運動として存する対象の内部を対象そのものたる実在と見なし、これを「絶対」の姿で認識するための方法論として〈分析的認識のみでは不可能だ〉というベルクソンの主張をみた。また、本論では既に、ベルクソンにおいて、実在を「絶対」の姿で認識するための方法論として、〈分析的認識と直観的認識とを混同した認識〉も採用できないことを予告しておいた。では、早速この二つ目の認識様態に対するベルクソンの判定をみていこう。

〈分析的認識と直観的認識とを混同した認識〉に対するベルクソンの判定は次のようになる。すなわち、哲学と科学の関係には〈直観と分析の混同〉という思考様態のもとで捉えられるやり方があるが、そのような実在を認識する方法論は本質的に差異が存するものを混同させて捉えるものであるため退ける必要がある、というものである。そして、本論の見るところ、「形而上学入門」以前から提示されていた「時間の空間化」（DI:ch.2）への批判や「記憶の脳局在説」（MM:ch.2）への批判なども、本来であれば質的なものを量的なものに還元させて捉える〈人間知性による一般化の傾向〉を如実にあらわす〈混同〉の事例として提示されたものといえよう。

ベルクソンによると、分析的認識と直観的認識との混同が起きたのは、運動の内部という実在の認識を巡って、「絶対は無限であるか」と問われたところから始まる。ベルクソンが「絶対と無限とは共に、これまでしばしば、同じものと見なされてきた」（PM:180/256 頁）と指摘する時、念頭に置かれ

ているのは、絶対を「完全」ではなく、「無限」と同一視するところに、分析と直観の混同の起源をみてとる点にある。本論では紙幅の都合上取り扱わないが、ベルクソン自身のエレアのゼノンに対する批判も³⁾、この〈絶対と無限を同一視する知性の誤謬〉という論点に向けられているといえよう。

では、絶対と無限を同一視する認識のあり方をみよう。ベルクソン曰く、その始まりは分析的認識において「実在は無限分割が可能であるからこそ絶対として存在する」(ibid.)と信じたところにある。この立場の主張はこうだ。

実在を「絶対」とみなすにあたって、重要なのはベルクソンのいう運動の内部を認めるか否かにあるのではなく、「共感」が指し示す「内からの認識」の内実にある。すなわち、実在を絶対とみなすために必須なのは、「内からの認識」であっても、対象を一步步ずつ解明していくかのような分析的な認識過程である、と〈絶対と無限を同一視する立場〉は立論する。

例えば、私たちは、自分の中で何か確信めいたものをえた時、その確信を単純な言葉で表現するためにいい換えにいい換えを重ねて何とかそれを説明しようとする。もちろん、このいい換えを試みる過程は、どこまでも終わりはないが、やればやるほど最初の確信に一步步ずつ近づくような感触をえることができるものである。そして、いい換えの過程でえた論理化の感触が自分なりの基準点を越えた時、最初の確信は〈絶対〉として現れた、と私たちは判断する。ここで重要なのは、最初にえた確信が〈絶対〉であるか否かを検証するうえで、この「無限に分割しながら説明し続ける」過程が不可欠であるという点である。まさに、〈絶対と無限を同一視する立場〉にとって、最初の確信たる運動の内部として最初に獲得した実在とは曖昧かつ複雑なものであり、それが絶対であることは無限分割によって最初の実在を厳密かつ単純にしていく過程から確かめられるものである。かくして、この立場は、運動の内部として直観的に現れる実在の絶対性を分析による無限分割によって裏付けて保証する立場といえよう。直観の絶対性はその明確化に向けた無限の分析過程でのみ説明可能だと仮定するのだから、〈絶対と無限を同一視する立場〉は〈人間認識を分析と直観を混同させて描く立場〉なのである。本論では、この立場を暫定的に〈混同派〉と呼んでおく。

では、ベルクソンが〈混同派〉にいかなる応答を行うかをみよう。私たちのみるところ、ベルクソンがこの立場に対する批判を通じて取り出すのは、

〈人間認識の出発点を「単純なもの」に見定めること〉である。

ベルクソンからすると、〈混同派〉は最初に直観を必要とするが、分析を進めていくにつれて最初の直観と分析の過程で獲得されたものとを置き換えており、その置き換えたものを実在と呼んでいるに過ぎない。ベルクソンによる批判の内実を理解するにあたって有効なのが、本論が〈混同派〉と呼ぶ発想には『純粹理性批判』第26節でカントが提示する「把握の総合」とほぼ同じ方向性をもつことを確認することであろう。カントによれば、ひとつの経験的直観は多様な表象を含む「複雑」なものとして与えられるが、それをアприオリなカテゴリーによる分析によってひとつの「単純」な対象へと把握される(Kant 1956=1781/1787:B164)。すなわち、ひとつの経験的直観はカテゴリーによる分析的な把握なくしてひとつの対象として捉えられない、というのがカントの発想である。

ここで指摘しておくべきことは、カントの発想と〈混同派〉の発想とが軌を一にする次の①～③の段階に基づく前提が存する点である。すなわち、①はじめに与えられた直観は豊かな内容をもつと同時に錯雑なものである。②分析は直観の錯雑さだけを取り除くことを目指す。③最終的に豊かな内容だけが残った単純化された分析後の直観を〈最初の直観〉と見なして構わない、という前提である。〈混同派〉が前提するような発想に対して、ベルクソンは批判的な視座を向けている。というのも、「複雑なものを単純なものへと分割していく」という仕方で進める〈混同派〉の操作は、人間認識を、直観によって捉えられた複雑な実在を分析による認識で単純な実在へと還元して捉えていることになるからである。

これに対し、ベルクソンは「複雑なものから単純なものへ」という仕方で人間認識を規定しない。むしろ、ベルクソンは、一般的で日常的な人間認識は「単純なものから複雑なものへと進む」と考える。そもそも、〈混同派〉は人間認識の出発点に「複雑なもの」を前提するが、この前提に十全な根拠があるわけではない。むしろ、この前提は、際限なく進められた思考過程から回顧的に形成された〈前提に偽装した仮定〉である。そうであれば、人間認識の出発点に「単純なもの」を置いても問題はないといえよう。ただし、これは消極的な論理的理由に過ぎない。より根本的な理由をみよう。

仮に「複雑なものから単純なものへ」という仕方で人間認識が進むのだと

しても、最終的に提示される實在の絶対的な姿が「単純なもの」であるならば、最初の「運動の内部」と呼んでいる實在の姿は「複雑なもの」ではなく「単純なもの」でなければならない。というのも、私たちは対象に対する視点や象徴的記号の数が増えれば増えるほど、対象は抽象化されると同時に複雑化されていくことを知っている。このことは、「複雑なものから単純なものへ」と人間認識は進んでいると思いついていたが、実際起こっていることは最初の経験で獲得した単純さが消え去る代わりに、複雑さが増していくことである。そうであれば、「視点や象徴的記号の数を増やせば増やすほど最初の複雑さが解消される」という〈混同派〉の人間認識の主張は端的に誤謬だといわざるをえない。これに対し、ベルクソンは一般的な人間認識を「視点や象徴的記号の数が少なければ少ないほど複雑さが減少する認識」とすると同時に、「視点や象徴的記号への依存が無ければ最初の実在の絶対の姿は単純なものとして認識する」と規定する。

ベルクソンの批判の核心は以下のものである。それは、〈絶対と無限を同一視する〉立場は、實在を分割し切れない複雑なものとし、その複雑なものとして措定された實在たる対象を人為的な分割で単純なものへと無限に漸近可能だ、という仕方でのみ人間認識を捉える点に存する。かくして、直観と分析を混同させることで直観的認識をそのまま分析的認識へと置き換える、という認識における混同の方法は實在を捉える方法とはなりえないことになる。以上が第2の認識様態に対するベルクソンの判定である。

4. 形而上学の〈入門〉：ベルクソンにおける〈やり直しの論理〉

ここまで、實在の認識は分析的認識のみでは不可能であり、同時に直観的認識と分析的認識の混同でも不可能であるというベルクソンの批判を見てきた。いまや、第3の認識様態の検討、すなわち〈實在を絶対の姿で認識する方法は形而上学的な認識である直観のみ可能だ〉というベルクソン自身の主張の検討に移るべきである。

それにしても、ベルクソンはなぜ「直観」という認識方法でなければ實在の認識は可能ではない、と考えたのだろうか。この問いをもう少し正確に述

べれば、ベルクソンはなぜ知性主義的な科学的認識と切り離す形で形而上学的認識を打ち立てなければならないと考えたのだろうか、というものになる。改めて指摘しておく、単にベルクソンが認識論的整理を行いたくて「実在的な持続」との関係から科学的認識と形而上学的認識を区別しているわけではない。本論が見るところ、「形而上学入門」で提示した「形而上学的認識たる直観」と「科学的認識たる分析」の区別は、その区別を強調することのみにベルクソンの意図があったわけではない。その程度でよければ、上述の二つの立場への批判を行えば十分だからである。ベルクソンの意図はその先にあったのである。すなわち、ベルクソンは「形而上学入門」冒頭の区別を用いて〈実在認識における位置づけを徹底的に更新する意図をもっていた〉こと、これこそが「形而上学入門」という論文の本来の意図であったのではない。そして、この仮説のもとで〈実在を絶対の姿で認識する方法は形而上学的な認識である直観のみ可能だ〉というベルクソンの方法論を検討すると、実在認識の位置づけの更新を狙うベルクソンの姿も鮮明になる。次の引用を見よう。

以上のことが仮定されるならば、実証科学というものが分析を常習的機能とすることは苦もなくわかるはずである。もっとも具体的な自然科学、つまり生命の科学でさえも、生物や、その器官やその解剖学的要素がもつ目に見える形だけに関わって満足している。生命の科学はそれらの形を相互に比較し、もっとも複雑なものを、もっとも簡単なものに還元し、結局、生命の視覚的記号とでもいうべきものにおいて、生命の働きを研究している。もし、実在を相対的に認識する代わりに、それを絶対的に所有する手段があれば、また実在に対してさまざまな観点を採用する代わりに、その内に身を置く手段があれば、また、実在を分析する代わりに、それを直観する手段があれば、結局、表現や翻訳や記号的表象以外に、実在を捉える手段があれば、これこそ、まさに形而上学である。形而上学とは、だから、記号なしにすませようと志す科学である。

(PM:181-182/258 頁)

実証科学は分析を常習的機能として行う科学である。それに対して、形而上学は「実在を分析する代わりに、それを直観する手段」のもとで行われる「記号なしの科学」である。このベルクソンの一節は、分析と直観の差異という論点と共に、実証科学と形而上学の「学」としての差異を示すものとして知られている。ここには、一方で哲学（形而上学）的認識は直観によって絶対に達するが、科学的認識は相対的な記号的関係の記述に留まるとベルクソンは断言している、という指摘の発生源が存する。

では、このような二元論的な指摘に留まることで十分だという立場を越えて、ベルクソンの「記号なしの科学」というアイデアを解釈するにはどうしたらよいのか。それは、「記号なしの科学」という概念を〈直観に基づく科学〉として文字通り読み切る解釈を提示することである。すなわち、直観と分析の両認識が相補的に進む実在認識のあり方もありうる、という仕方ではベルクソンの方法論を描き出すためには、上述の引用に対して有効な視座を与えることが不可欠となる⁽⁴⁾。そして、本論ではその視座を、一般的に形而上学の認識とされているものでも持続から離れ空間化された認識に陥っている場合は「科学的な認識」とみなすと同時に、一般的に科学の認識とされているものでも空間化された認識ではなく実在的な持続の関わりが保たれている場合は「形而上学的な認識」と呼ぶべきだ、という観点から与える⁽⁵⁾。

「学 science」という言葉に着目する時、直観と分析という二種の認識は、形而上学と科学という二つの学で遂行される実際の操作にも見てとることができるものであり、この認識の区別を基礎にそれぞれの学問領域を確定することになる。その上で、ベルクソンによれば、私たち人間種の認識は「単純なもの」から出発せざるをえないという前提があり、最初の単純なものを直観によって認識する仕方が形而上学、それ以外の認識の仕方が科学とできよう。ベルクソンは、この認識論上の区別を基準として学の行為を判定する。

そうであれば、もし科学者であっても直観としかいいようがない仕方ではその操作を遂行しているならば、それは「科学としての形而上学」として分析的な認識から切り離されたものとして捉えなければならない。反対に、もしも形而上学者—ベルクソンであれば「観念論者」や「実在論者」と呼ぶ形

而上学者—であっても、上述の「分析」としかいいようがない仕方での操作を遂行しているのならば、それは〈悪しき形而上学（＝形而上学としての科学）〉でしかないことになる。それゆえ、ベルクソンによれば、「形而上学としての科学」の営みは、この直観的な認識から切り離されたものとして捉えなければならない。

いまや「形而上学入門」という論文の本質的な点を取り出された。それは、分析的な認識とは〈○○としての科学〉と言い換えられるような認識のあり方であり、直観的認識とは〈○○としての形而上学〉と言い換えられるような認識のあり方を示すということである。前者の〈○○としての科学〉という認識のあり方は、本来「単純なもの」でしかなかったものを外在的な観点を通じて「複雑なもの」へと進める認識のやり方であり、これでは単純なものとして存する実在そのものは捉えられない。これに対し、後者の〈○○としての形而上学〉と捉える認識のあり方は、「単純なもの」として存する対象に「内部」を認め、「共感」という対象の内に入るような認識を通じて実在そのものを捉えるのである。こういってよければ、後者の認識のあり方を採用する学こそが「形而上学」であり、この認識方法によって実在そのものの探究の方向へと向かうことこそが〈形而上学に入門すること〉である。したがって、〈形而上学に入門する〉ために、ベルクソンは知性主義的な科学認識と切り離す形で形而上学的認識を打ち立てなければならなかった。この点に「形而上学入門」前半部で展開される認識に関する二つの区別におけるベルクソン特有の意図があった、とひとまずはいえよう。

とはいえ、直観的認識という認識のやり方を理解することは、まだ形而上学の門をくぐったに過ぎない。形而上学の仕事は、形而上学の門をくぐった先にある。では、私たちはいかにして形而上学の仕事にとりかかるのだろうか。次の引用を見よう。

既成の概念を用いて、事物の奥深い本性の中へ入り込もうと欲することは、不動の観点を与えるために作られた方法を、実在の動きに適用することである。このやり方はまさに次のことを忘却することになる。それは、もし形而上学が

可能であるならば、それは思考の働きの自然な坂 *la pente naturelle du travail de la pensée* を登るための努力、精神の拡張を通じて探究するものの中に直ちに身を置くための努力、つまり概念から実在に行くのではなく、実在から概念へ行くための努力でしかありえないことである。(PM:206/285 頁)

既成の概念を用いて事物の「奥深い本性」に入り込もうとすることは、不動の観点を与えるために作られた方法を用いて実在の「動き（＝内部）」を適用させることである。既に私たちは確認したように、これこそが「外からの認識」、「視点と象徴的記号に依存」、「相対に留まる」という三つの特徴をもつ「分析」というやり方の認識である。そして、この認識は「思考の自然な坂を下る」ような、人間知性にとって非常に常習的な自然な認識の傾向であり、まさに〈形而上学の門前〉に立ち尽くすに留まる認識である。

これに対し、上述の引用の「もし形而上学が可能であるならば」以降で述べられるベルクソンの主張は、〈形而上学の門〉をくぐった後の、形而上学の仕事にとりかかる姿が描かれているといえよう。すなわち、形而上学の仕事とは、「思考の働きの自然な坂を登る努力」、「精神の拡張を通じて探究するものの中に直ちに身を置く努力」、「実在から概念へ行く努力」に他ならない。

もう一步踏み込もう。重要なのは、これらの努力に存する〈やり直しの論理〉とも呼ぶべきものに気がつくことである。坂を登るためには既に坂を下っていないなければならないし、探究対象の中に身を置くためには既に探究対象が現に存在していないなければならないし、実在から概念へと向かうためには既に概念とは何であるかを理解していないなければならないはずである。すなわち、形而上学の仕事とは、既に分析的認識によって下った坂を登り直す努力、既に分析的認識によって外観がはっきりとしている対象の中に入り直す努力、既に分析的認識によって把握している概念的なあり方を実在から辿り直す努力でなければならないはずである。かくして、「形而上学がもし可能であるならば」、対象に対する外的認識を経てから、対象に対する内的な認識によって〈やり直す〉ことが必要ではなかろうか。そうでなければ、ベルクソンが「私のいう方法だけが[.....]分析が大問題の周りに積み重ねる

様々な不明瞭な点を次第に払い除けることができる」(PM:206-207/286 頁)という時、直観認識によって何が払い除けられたのか理解できなくなるだろう。〈形而上学の門〉をくぐり、直観認識を対象に応じて進めるにつれて、分析認識によって積み上げられた問題が「払い除けられる」のである。ここに、ベルクソンの主張する「形而上学の仕事」とは、〈分析によって進んだ認識を直観によってやり直す〉ことに存する、と解する余地が残されている。

ベルクソンの直観概念に分かち難く結びついている〈やり直しの論理〉とでもいべきモチーフを理解する限りで、本節冒頭で強調した〈ベルクソンは「形而上学入門」冒頭の区別を用いて實在認識における位置づけを徹底的に更新する意図をもっていた〉という仮説を立証することができる⁽⁶⁾。すなわち、ベルクソンは、分析／直観という認識の二つのあり方を学における探究のあり方と規定する。そして、現に分析という認識のあり方で探究が進んできた〈科学としての科学〉あるいは〈形而上学としての科学〉として捉えられてきた科学の領域を、直観的認識によって「科学としての形而上学」として捉え直すことを試みる。かくして、ベルクソンは、学の位置づけを現に位置づけられている仕方から「直観的な仕方」で変更する構想を抱いていたといえよう。これこそが、両義的だという誹りを受けたベルクソンの〈直観的な科学〉というヴィジョンに対するひとつのありうべき見立てである。

誤解を招かないよう予め注意しておくと、これまでの人類が打ち立ててきた学の位置づけを直観的な認識のもとで再編成する、という主張はベルクソン自身から直接引き出せるものである。このことをベルクソンが形而上学の方法の基礎にある諸原理を命題に分けて述べる箇所から確認しよう

(PM:211-215/291-296 頁)。ベルクソン曰く「外的なものであるが私たちの精神に直接与えられた實在がある *Il y a une réalité extérieure et pourtant donnée immédiatement à notre esprit*」(PM:211/291 頁)。そしてこの直接与えられた實在とは「変化しつつ出来つつある動き」(ibid.)であるが、私たちの日常的な生は、その実用性の利益に引きずられて、實在の「固定した点」を求め、動きとして存する實在を「状態 *états*」や「事物 *choses*」として表象する (PM:211-212/291-292 頁)。まさに、私たちの知性の働きは「固定した知覚 *perceptions solides*」と「安定した概念 *conceptions stables*」(ibid.)に基づいて「自然な坂」

を下ることに他ならない。この時、知性は動きとして存する实在を精神によって仮構された「固定点」で置き換える。しかしながら、知的な分析認識によって動きとして存する实在から概念を生み出し、今度はこの实在の固定点たる概念から動きとして存する实在を体系として再構成しようと試みるとしても、それは失敗が約束されている。なぜなら、「全ての認識は輪郭の画定した概念から必然的に出発し、その概念を用いて流れる实在を捕捉すべきだと仮定する」(PM:213/293 頁)ことは、動きとして存する实在という「絶対的なもの」を捉える方法とはなりえないからである。

次の引用を見よう。

6. しかし本当は、私たちの精神は[固定した概念で实在の動きを再構成するやり方とは]逆の道を辿ることができる。私たちの精神は動く实在の内に身を置き、实在の絶えず変化する方向を我がものとし、つまり直観によって实在を把握することができるのである。そのためには精神は自らに激しく暴力を振るい、自らの思考の常習的操作の方向を反転させ *renverse*、自身の思考の型を絶えず裏返す *retourne* か、あるいはむしろ自身の思考の型を改鑄する *refonde* のでなければならない。このようにしてこそ精神は、实在の迂余曲折をあますところなく辿ることができる流動的な概念、事物の内的生命の運動そのものを我がものとすることができる流動的概念に到達するだろう。このようにしてはじめて、ひとつの前進する哲学が形成され、その哲学は学派間で行なわれている論争から解放され、そしてさまざまな問題を投ずるために選ばれた人為的な術語から解放されてしまっているがゆえに、諸問題を自然に解決することができる。哲学するとは思考の働きの習慣的な方向を逆転することである *Philosopher consiste à invertir la direction habituelle du travail de la pensée*。(PM:213-214/293-294 頁)

この引用の前の箇所から確認しておこう。命題 1、2 (PM:211/291 頁)において〈外的なものではあるが私たちの精神には直接与えられた動きとしての实在がある〉ことが確かめられ、そして命題 3、4、5 (PM:211-213/291-293 頁)において〈私たちの精神の自然な傾向として動きとしての实在に固定点を求め、その固定点を知覚と概念によって拵え、その拵えた不動の要素で動

きとしての実在を再構成しようと私たちは試みてきたが、この概念から出発し実在へと至ろうとする方法は常に失敗してきた）ことが確かめられる。その上で、「しかし本当は、私たちの精神は逆の道を辿ることができる」とベルクソンは主張する。

では、この逆の道とは何か。それは、繰り返しになるが「直観的認識」によって〈自然の坂を登る道〉のことであり、それ自体は実在の内部（＝対象の内に認める気分のようなもの）への共感という既出の議論の繰り返しともいえる。しかし、ここで目を引くのは、私たちの常習的な思考の操作の方向の「反転」、私たちの思考の型の「裏返し」や「改鑄」といった〈やり直し^レの論理〉のイメージが強調されている点である。この「精神が逆の道を辿る」やり方は、「精神が精神に暴力を振るう *se violente*」⁽⁷⁾という表現から見てとれるように、知性の自然な坂を登る「反転」、「裏返し」、さらには「改鑄」といった〈形而上学的な思考の方向変化〉あるいは〈形而上学的な思考の作り直し〉という発想を要請しているといえよう。

加えて指摘しておくべきことは、おそらくは実在の「内部」を示す「流動的概念」ではなく、むしろこの反転によるやり直しが「実在の迂余曲折をあますところなく辿ることができる」と主張されている点にある。このことを次のように定式化しておきたい。すなわち、「形而上学としての科学」あるいは「科学としての科学」として実在の探究が進められるということは、まさに知性の自然の坂を下る営みである。まさに私たちは、その坂を下る営みを常習的な仕方で行ってきた。しかし、私たちの精神が精神に力を振るい反転が起きた時、私たちは坂を登ることができるのだが、その坂とは〈私たち^レがこれまで下^レってきた道〉以外にはありえないのではないだろうか。そして、その「迂余曲折をあますところなく辿る」というのは、自然の坂がまさに知性にとって下りやすく舗装されていた既成概念の道であるならば、その迂余曲折とは坂を下る途中で概念化することができなかったもの、あるいは分析的認識では捉えられず直観的認識でしか捉えられないものが岩のように転がっている道を示すのではないだろうか。そうであれば、人類がこれまで知性的な分析認識のもとで下った坂を、反転した人間精神が「あますところなく辿る」ということは、これまで「〇〇としての科学」と見てきたものを「〇〇としての形而上学」として辿り直すことではないだろうか。

ここには、これまでの人間種が打ち立ててきた学の位置づけを直観的な認識のもとで再編成する、という発想をベルクソンがもっていることの証左がある。ベルクソンの「哲学するとは思考の働きの習慣的な方向を逆転することである」という主張は、いまやこういってよければ、諸学の形而上学的再編成こそが哲学の役割であると理解することができよう。次の引用を見よう。

7. そうした逆転 **inversion** が方法論的なやり方で行われたことはかつて一度もなかった。しかし、人間の思考の詳細な歴史を見れば、形而上学における生命に満ちた思想と同じく、これまで科学においてなされた最も偉大な成果の数々も、この逆転のおかげであることがわかるだろう。(PM:214/294 頁)

直観的認識を採用し、これまで分析的認識によって歩んできた道のりを辿り直すかのように探究を行う、という「逆転」はこれまでかつて一度たりとも方法論的に遂行されることはなかった。しかしながら、一度もこの逆転が見られなかったということではない。むしろ、ベルクソンによれば、「人間の思考の詳細な歴史を見れば、形而上学における生命に満ちた思想と同じく、これまで科学においてなされた最も偉大な成果の数々も、この逆転のおかげであることがわかる」のである。

この意味で、直観と分析という認識論の区別から形而上学と科学のこれまでの成果を再編成する、という〈形而上学の門〉を進んだ先の仕事は、これまでの人類の歴史において数々見てとれるものとして規定される。

おそらくそのポイントは、分析的認識と直観的認識のどちらの認識を選ぶかは当の認識主体に委ねられていることが前提となっているといえよう。もちろん、直観が分析の逆転を必要とする以上は、直観が分析に比べて稀な認識であることは否定できない。また、大前提として、ほとんどの人間種は実利で生きているゆえ、分析が人間種にとって優勢である、ということも事実であろう。しかしながら、優勢であるということは、常にそのままでないといけない、ということの意味するわけではない。この意味で、分析と直観のどちらの認識を選ぶかは当の認識主体に委ねられているために、ベ

ルクソンが主張する〈〇〇としての形而上学〉というヴィジョンが成立する。

こうして、科学の領域であれば必ず分析を選ばなければならないということは全くない、というベルクソンの主張が取り出される。すなわち、一般に科学の領域とされているところにも「運動のひとつの内部」を認め、「完全」を保持する仕方でも内部から共感する直観認識を行う余地が十二分に残されている、というのがベルクソンの主張の核心である。加えて補足しておく、ベルクソンによる直観に基づく科学という主張には、いわゆる「実証科学」の境界を拡張する示唆が含まれるということである⁽⁸⁾。かくして、知性と直観の関係は、「形而上学入門」において「対象に対する分析の成果を踏まえた上で、対象の内部を捉える直観によって辿り直す」という方法論として明確に整備された、と評価できよう。

また再編成された結果、直観の側に位置づけられたものは「単純なもの」であり、人間種はそこを出発点とすると同時にその「運動の内部」を分析とは関係がない仕方でも捉えることで探究を進めることができる、と考えることができる。この地点において、哲学と科学の境界は現在の私たちが常識として受け取っているものとは似ても似つかないものになっていよう。しかし、ベルクソンが、〈直観的な科学〉を「ありえた科学」として提示する「近代科学としての形而上学」は、このような仕方では取り出せないものである。ベルクソンにとって哲学とは、そのような〈経験の転回点としかいいようがないところに至る経験〉を描く学である (PM:218/298 頁)。このことを明らかにしたのが「形而上学入門」という論文であった。

5. おわりに

本論は、ベルクソンが「形而上学入門」で提示した直観と分析という概念の役割を「形而上学に基礎付けられた方法論」という観点から、次の (1) から (3) の論点を明らかにした。(1)「形而上学入門」の読まれ方を 1900 年代から 1960 年代まで検討し、多様な論者からベルクソンの「方法論」に関心が寄せられていたことを見た。(2)「形而上学入門」というテキストにおいて両義的な評価の原因ともなる直観と分析の二元論的な区別の意義を

〈ベルクソン自身の方法論的な省察において採用できない立場への批判〉と結びつけて明瞭にした。(3) ベルクソンにおける「直観」概念の中でも〈やり直しの論理〉とでも呼ぶべきベルクソン独特の实在認識及び学の進歩に関する捉え方の検討から、ベルクソンが〈实在認識における既存の位置づけを直観によって徹底的に更新する意図をもっていた〉ことを指摘した。

しかし、(3) に関わる議論として、ベルクソンの〈直観的な科学〉に該当する「ありえた科学」の理論的検討を十分に行うことができなかった。これは、本論の視座から「共生学」の豊かな実践知を掘り下げる仕事と共に、今後の課題として別稿に譲りたい。

注

- (1) ベルクソン自身の発言を引いておこう。「この論文が書かれたのは、カントの批判主義とそれを継承した人々の独断主義が、哲学的思索の結論とまではいえないにせよ、少なくともその出発点として、かなり一般的に受け入れられていた時期であるということだ」(PM:177/308-309 頁)。また、『思考と動くもの』(邦訳名は『思考と動き』)の訳者である原は、上記のベルクソンの発言から読み取れる人々を、ベルクソンの論敵であった O. アムランや L. ブランシュビック、そしてフィヒテの独断主義であったと指摘する。この思想史的事件に関する詳細な研究は杉山(1997)が行っている。また、「形而上学入門」で提示される認識論は、『意識に直接与えられたものに関する試論』以来の「持続の把握」という問題系に属するものである。これまでの著作でベルクソンは、相互浸透的な流れとして存する時間的存在たる持続(=实在の運動)と、時間的存在に知性や知覚による相互外在的な切り分けを行うことで存する等質的な空間たる延長(=空間化された实在の運動)との間に「本性の差異」を見てとっていた。そして、後者の空間認識を日常生活の認識、科学的認識という人間知性特有の持続していないものに関する認識としてベルクソンは規定した(DI:ch. 2)。以上の認識論における二元論的な構図を〈形而上学的認識としての直観と科学的認識としての分析〉という概念で整理したはじめての論文が「形而上学入門」なのである。
- (2) 一例をあげると、〈翻訳書とは翻訳者の解釈のもとで翻訳されたものに過ぎないのであるから、その翻訳書の原典と翻訳書とは別物である〉という主張は、〈翻訳書は原典に備わる固有性(=ニュアンス)を移しきれていない以上破損物といわざるをえない〉ということを表現していることになる。しかしながら、小説家の事例で明らかのように、原典で読んだとしても「内部」を掴むことができなかったならば、それは「絶対」を捉えたことにはならないし、翻訳書であれ「内部」をたとえ希薄であれ掴むことができたのなら、「絶対」を捉えたことにはなるだろう。この理解は、「絶対」に段階を導入す

るものであり、こう言ってよければ、真理という概念に多元性を導入することでもある。この前提を受け入れる限りにおいて、原典よりも翻訳書の方が「内部」の欠損が存する以上、原典の方が「絶対に近づきやすいものだ」と理解すべきであろう。このような論点からベルクソンの著作の多くの箇所で見とることができる「翻訳」の議論を検討することは価値がある。しかし、本論では論旨から外れるものであるため、今後の課題としておきたい。

- (3) ゼノンのパラドクスとは、アリストテレスの『自然学』の中で紹介された「二分法」、「アキレスと亀」、「飛び矢」、「競技場」の四つのパラドクスのことである。特に西洋哲学において、感覚的世界と演繹的論理との齟齬を浮き彫りにするものとして、運動論、存在論、無限概念の変遷の中でしばしば参照されてきた。また、ベルクソンがゼノンのパラドクスに対する強いこだわりをみせていたことはよく知られている。その言及は、最初の著作である『意識に直接与えられたものに関する試論』から最後の著作である『道德と宗教の二源泉』に至るまで、そして『精神のエネルギー』や『思考と動くもの』に収録された諸論文の多くからも確認できる。それだけに、ベルクソンがゼノンのパラドクスを扱う時、その著作ないしは論文で扱う主題に応じて取り上げられ方が異なることに注意されたい。ただ、本論が指摘したいことは、ベルクソンのゼノン批判は「変化や運動の否定」を導くにあたって行うゼノンの推論それ自体に存する〈人間知性による一般化の傾向〉に向けられているということである。
- (4) この路線でベルクソンの形而上学を評価し直しているのが Riquier (2013) である。Riquier は、ベルクソンが「形而上学入門」で展開させる「形而上学」の核心は、カントが未完のままにした「直観的な知性」を重視する道をベルクソンが完成させようとした点に存する、と指摘する (cf. Riquier 2013:38)。
- (5) このような、本来あるべきものをその場所に戻す、とでも表現したくなるベルクソン自身の態度は、『試論』の「序文」においてもはっきりと述べられている。また、この箇所に関する読解としては村山 (2009) のものが有益である。
- (6) このアイデアを構想する上で参考になったのが三宅 (2012) である。三宅は、デュエムやポアンカレによる「形而上学の排除にくみすることはない科学認識論」の考え方が、ベルクソンに与えた影響を「科学的仮説に選択の自由を認めること」と「形而上学を排除しない」の二点にみてとれることを示す (三宅 2012:12)。そして、ベルクソンは、デュエムやポアンカレと異なり、形而上学と科学的仮説との関係を積極的に関連づけるように議論を進める点が指摘される。その上で、三宅は、「ベルクソンは、とりわけ実在に関する主張に強調点があるときには、哲学を形而上学と呼ぶのであるが、彼はこの形而上学を仮説と見なし、さらにそれを検証可能なものとする試みとして定式化するのである」と指摘する (ibid)。本論では、「形而上学を仮説と見なし、さらにそれを検証可能なものとする試み」という三宅の指摘を、〈分析によって進んだ実在に関する認識を直観によって認識し直す〉ことでなされる〈実在認識における位置づけを徹底的に更新する試み〉と読み換える。そのメリットは、三宅が「[形而上学を仮説とみなす]考えは、19世紀後半から20

世紀前半に一つの伏流を形成していたのかもしれない」（三宅 2012:13）と注で指摘するように、形而上学の排除のもとで進みがちな科学的な進展に形而上学の領分をやり直し回復させながら進む方法論、というジェイムズやベルクソンに通底する新しい哲学の姿を、現代に意味ある形で描き出す点にある。

- (7) この表現に着目しているのが藤田（2022）である。特に § 8 から § 12 までを確認されたい（藤田 2022:24-38）。
- (8) 一見すると、ベルクソンによる直観に基づく科学という主張は、その内的プロセスの重視ゆえに〈実証科学で重視される客観性や検証可能性が満たされない〉ように思われるかもしれない。この疑問に対し、『創造的進化』以降のベルクソンのテキストから「心理的解釈」というべき論点を取り出した濱田（2024）の論文は非常に参考になる。そこでは、「実証科学」とは異なるベルクソンならではの方法論や客観性の基準が提示されている。

参考文献

- Benda, Julien. 1910. *Le bergsonisme ou une philosophie de la mobilité*. Paris: Mercure de France.
- Bergson, Henri. 2007=1889. *Essai sur les données immédiates de la conscience*. PUF.（合田 正人・平井靖史訳、2002.『意識に直接与えられたものについての試論：時間と自由』ちくま学芸文庫。引用では DI と表記した。）
- Bergson, Henri. 2010=1896. *Matière et mémoire*. PUF.（杉山 直樹訳、2019『物質と記憶』講談社学術文庫。引用では MM と表記した。）
- Bergson Henri, 2009=1938, *La pensée et le mouvant*. PUF.（原 章二訳、2013.『思考と動き』平凡社ライブラリー。引用では PM と表記した。）
- Deleuze, Gilles. 1966. *Le Bergsonisme*. PUF.（檜垣 立哉・小林 卓也訳、2017.『ベルクソニズム』法政大学出版。）
- Deleuze, Gilles. 2002=1956. «La conception de la différence chez Bergson», *L'île déserte et autres textes*, Minuit.
- Kant, Immanuel. 1956=1781/1787. *Kritik der reinen Vernunft*. Felix Meiner.
- Péguy, Charles. 1987. *Œuvres en prose complètes tome I*. Paris: Gallimard.
- Riquier, Camille. 2013. « La relève intuitive de la métaphysique : le kantisme de Bergson », ed. Worms, Frederic. et Riquier, Camille. *Lire Bergson*. pp. 34-59. PUF.
- Russell, Bertrand. 1914. *Our Knowledge of the External World*. Open Court Publishing.（石本 新訳、1971『外部世界はいかにして知られうるか』中央公論社。）
- Russell, Bertrand. 1918. *Mysticism and Logic and Other Essays*. George Allen & Unwin.（江森 巳之助訳、1959『バートランド・ラッセル著作集第4巻：神秘主義と論理』みすず書房。）

Sorel, Georges. 1972=1908. *Réflexions sur la violence*. Paris: Rivière.

杉山 直樹 1997 「「新哲学」論争について」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』
4:67-111.

杉山 直樹, 2006 『ベルクソン：聴診する経験論』創文社.

濱田 明日郎 2024 「ベルクソン『創造的進化』による生命進化の「心理的解釈」の意義」『哲学』 75:296-312。

檜垣 立哉 2000 『ベルクソンの哲学』勁草書房。

藤田 尚志 2022 『ベルクソン：反時代的哲学』勁草書房。

三宅 岳史 2012 『ベルクソン哲学と科学との対話』京都大学学術出版会。

村山 達也 2009 「ベルクソン『直接与件』における問題と実在」『哲学』 60:279-293。